

和 国

ワキ 丹後の僧

ヲカシ 里人

シテ 和国

地は 京都

季は 秋

「身を捨てゝ住む山にても。く。憂き時いづち行
かまし。

「是は丹後の国より出でたる僧にて候。我いまだ都
を見ず候ふ程に。此秋思ひ立ち都に登り候。

「大江山。幾野の道の遠けれど。く。乗らでや過
ぎし里の名の。馬路河原路打ち過ぎて。跡より恋
のおひの坂。桂の川の渡し舟。法の道をや尋ぬら
ん。く。

「急ぎ候ふ程に。是は早都に着きて候。我宿願の子
細候ふ間。先づ北野の経蔵に参らばやと思ひ候。
所の人の渡し候ふか。

「シカく。

「是は此処始めて一見の者にて候。何事にても珍し
き事候はゞ。見せて給はり候へ。

「シカく。

「其和国とやらん参りて候はゞ見せ候へ。

シテ「桜木を。時雨や黄葉に染めつらん。右近の馬場の秋の色。」

ワキ「是は承り及びたる和国にてましますか。」

シテ「見申せば旅の御僧と見えつるが。我名を和国と宣ふ事。返すぐも不審なり。よし／＼それは兎も角も。何の故にて有るやらん。」

ワキ「さてさて御身の住み給ひし。在所はいづく何故に。和国と名を付け給ふぞや。」

シテ「是は一条桃園のあたりに住む者なるが。我歌の道に心を寄せ。其道を極めし故にや。少し慢ずる心ありて。かやうに現なくなりたるにより。京わらんべの言ひ習はしたる異名にて候。」

ワキ「げに／＼是は理なり。されども天満御神の。誓はまさに曇らねば。直なる心と成り給ふべし。我等は田舎の者なれば。歌道の事は知らねども。都の土産に語り給へ。」

シテ「いでいで語つて聞かせ申さん。

シテクリ「抑大和歌と申すは六義あり。

地「是れ六道の巷に詠じ。千早振る神代の歌は。文字の数も定めなし。

サシ「其後天照大神の御弟。素盞鳴の尊よりして。三十一文字に定まる事。八雲たつ出雲八重垣の御神詠より。此国のことわざとして。

シテ「人間のみか鳥類も。

地「高間の寺に來りつゝ。鳴く鶯の声聞けば。歌の姿は備はれり。

クセ「さればにや畜類も。歌を詠ずるためしあり。浜の真砂を歩み行く。蛙の道の跡見れば。住吉の。海士のみるめにあらねども。仮にも人に。又訪はれぬると。水に住む蛙まで。和国の風俗。神の御代より始まれり。

シテ「さればにや大国に。

地 「詩を作る諸人は。三界を詠むるに。花鳥風月。

松風の私語。鼓は波の音。笛は龍の吟を以て。舞
楽をも作れり。唯人は。乱舞歌道に交はりて。心
を延ぶるこそ。万年の齢ひなるべし。

ワキ 「如何に申し候。此人は面白う狂ふと仰せ候ふが。

さもなくして歌道の事を諷ひかなで。狂気の様は
なく候。

ヲカシ 「さん候此人は忍妻の候ひしが。其許へ通へと申し

候へば。諷ひ狂ひ候。

ワキ 「さあらば急いで御狂はせ候へ。

ヲカシ 「心得申し候。如何に和国。かの御方より急いで御
通ひあれと申し来り候。

シテ 「何彼方より通へとや。通へば人や知る。又通はね
ば中絶ゆる。琴の糸切らさじと。夜々物を思はす
る。

ヲカシ 「何とて左様に仰せ候ふぞ。一夜なりとも御通ひ候

へ。

シテ「一夜二夜は馴れそめて。三夜にもなれば住吉の。
松は根毎にあらはるゝ。く。

地「顕はれて。く。出づるは君と我と君と。枕の上
に。かゝる涙の雨の夜も。雪の暁別れの鐘の音。
彼はいづれも思ひ見れば。歌の種とや成りぬらん。
く。